

学会・研修参加報告

平成26年度 日本医療薬学会がん薬物療法 海外派遣研修に参加して

九州大学病院 薬剤部

内田まよこ

Mayako Uchida

はじめに

日本医療薬学会がん薬物療法海外研修派遣員として、2014年5月29日から6月7日の期間、米国イリノイ州で開催された第50回米国臨床腫瘍学会（American Society of Clinical Oncology：ASCO）Annual Meeting とミシガン州アナーバーにあるミシガン大学病院（University of Michigan Medical Center）での研修に参加する機会を得た。深謝し、ここに謹んでご報告する。

ASCO 2014 Annual Meeting, 2014. 5.30-6.3

本学会は、毎年全世界から3万を超える参加者が集う世界最大規模の学会である。本学会のプログラムは、今後の標準治療になり得るエビデンスが示されるプレナリーセッションの他、口演やポスターセッションでは最新の臨床試験結果と治療の方向性に関する発表の他、教育セッション、研

究者育成セッションなど幅広い内容で構成されていた。これらの特別講演やシンポジウム等はすべてASCOサイト上のVirtual Meetingでも閲覧可能で、国内でも情報は得ることが出来るが、エンターテイメント性の高い学会の臨場感や、9つのスクリーンが完備された壮大な会場で行われるプレナリーセッションの緊迫感はその場に居合わせた者だからこそ感じ取ることが出来る感覚であり貴重な経験だった。また私のような初心者でも迷うことなく目的の会場へたどり着けるよう数多くのインフォメーション係が配置され、各会場の入り口にはガードマンが颯爽と立ち、サービスの充実とセキュリティの高さが伺えた。

今年のASCO2014では、大腸癌領域で大きなインパクトのあった発表として、KRAS野生型切除不能進行・再発大腸癌に対する一次治療としてのFOLFOX/FOLFIRI + ベバシズマブ療法（BEV併用群）とFOLFOX/FOLFIRI + セツキシマブ療法（Cmab併用群）を比較したALGB/SWOG 80845試験における生存予後について有意差がないことが報告された。全生存期間（OS）は、BEV併用群29.0カ月とCmab併用群29.9カ月（HR = 0.925, $p = 0.34$ ）、無増悪生存期間（PFS）は、それぞれ10.8カ月と10.4カ月であった（HR = 1.04, $p = 0.55$ ）。本試験は異なる作用機序を有する分子標的薬のファーストラインでの有効性を直接比較した大規模臨床試験である。加えて血液がん領域での印象



写真1 ASCO 2014 プレナリーセッション会場

に残った報告を2つ挙げる。1つは、再発もしくは再発かつ難治性の多発性骨髄腫に対し、脱アセチル化酵素阻害剤 panobinostat とボルテゾミブ、デキサメタゾンの3剤併用療法は、ボルテゾミブとデキサメタゾンの2剤併用療法よりも有効性が高いことが報告された。2つ目は、再発性/難治性CLL患者に対する ibrutinib 単剤投与は ofatumumab に比べ無増悪生存期間を有意に延長し、全奏効率も有意に高いことが報告された。いずれの結果も今後の治療方針に注目していきたい。

University of Michigan Medical Center での研修, 2014.6.4-6.5

ミシガン大学病院での2日間の研修では、両日も8時から16時まで行われ、午前中の3時間は臨床薬剤師の病棟回診に同行し、午後は貧血マネジメント、臨床研究、内服薬の抗がん剤指導と支持療法、副作用症状マネジメント、学生教育などに関する講義を拝聴した。薬剤師の業務は分担化され、臨床薬剤師は終日患者ケアに携わり、調剤を行うことがないので、薬剤の剤形や色・形などは分からないとの説明を聞き、業務の専門化を垣間見た。

初日に同行した造血幹細胞移植病棟における医療チームは、医師、薬剤師、看護師、ソーシャルワーカー、栄養士、理学療法士等で構成され、病室前の廊下で電子カルテを見ながら原疾患、現在の治療状況、副作用への介入点、問題点などについて、議論内容に応じて各職種がそれぞれの立場から発言していた。多職種でのチーム回診が毎日行われるため、患者に発生した問題点を異なる視点から瞬時に解決していく姿を目の当たりにし、非常に専門性の高いチーム医療の在り方を見た。また薬剤師が画像を見ながら新規肺炎像について我々に説明してくれる場面があり、画像を読影できる欧米と日本の薬学教育体制の違いについて考えさせられた。臨床薬剤師は、医師から腎機能障害時の imatinib の投与量や妊婦への hyper-CVAD 療法施行の是非について意見を求められ、逆に薬剤師は主治医へ、レジメン変更提案の他、真菌感



写真2 ミシガン大学病院 外観



写真3 ミシガン大学病院 病棟スタッフ室

染症治療薬として voriconazole の処方提案並びに肺炎治療薬の注射薬から内服薬への変更提案をする等、治療方針決定に常に密接に関与していた。日本においても薬剤師がレジメン選択や薬物の投与設計に関与するケースも散見されるが、発展途上であると思われる。一方、化学療法時の服薬指導に関しては、説明方法、説明内容ともに日本と同じであり、むしろ患者にとって非常に分かりやすい説明用紙等のツールを用いた服薬指導を行っている日本スタイルの長所を再認識できた。

謝 辞

最後に、このような実り多い海外研修の機会を与えて下さったがん専門薬剤師認定制度委員会委員長の谷川原祐介先生をはじめ関係各位に謹んで感謝の意を表します。また、本研修への出張を快諾していただいた九州大学病院薬剤部長の増田智先先生、並びに海外研修へ快く送り出してくれた九州大学病院薬剤部の皆様方に心より深謝いたします。